

OKINAWA TO 沖縄ビジネスシンポジウム開催！(2022年10月29日/JICA 沖縄センター)

2022年10月31日～11月3日、世界中の沖縄県系人を称え、集いあう『第7回世界のウチナーンチュ大会』がコロナ禍による延期を経て、6年ぶりに盛大に沖縄で開催されました。JICA 沖縄センターでは、「おきなわ国際協力・交流フェスティバル2022」のメインイベントの一つとして「OKINAWA TO 沖縄ビジネスシンポジウム」を開催しました。(沖縄現地から全国各地、中南米へオンラインライブ配信し、会場とオンライン合わせて約220の方が参加。) **中南米日系社会と沖縄県企業が連携したビジネス**をテーマに、中南米に住むウチナーンチュ(沖縄にルーツをもつ人)と沖縄をつなげる活動や、海外進出を目指す企業の取り組みなどを紹介しました。



第1部:

1. OKINAWA TO 沖縄プロジェクト始動によるボリビア・オキナワ移住地の変化と今後の展望
2. 中南米のウチナーネットワークと JICA 事業を活用した海外展開

ボリビア沖縄県人会比嘉会長から、プロジェクト始動によるオキナワ移住地での変化、今の様子や展望について発表がありました。また、JICA ボリビア事務所とボリビア沖縄県人会主催で開催されたウチナービジネスワークショップで選ばれた日系青年代表者(玉城裕貴さん、玉城優美さん)が日本とのビジネスプランのプレゼンテーションを行い、若い世代から発信されるビジネスアイデアに参加者は大変刺激を受けました。



第2部: パネルディスカッション

世界のウチナーネットワークを活用したビジネスへの期待
海外・県内有識者によるパネルディスカッションでは、「スモールスタートからの成功体験が大事」「県として沖縄ブランド確立に産官学で取り組む」「人材育成・若手が動きやすい環境づくりが重要」などの活発な議論がなされ、新たなビジネスの可能性や課題について意見が交わされました。

そしてシンポジウム終了後の会場では、登壇者達と会場参加者達が名刺交換などをしながら意見交換、交流する場面も JICA 沖縄体育館内あちこちで見られ、このシンポジウムをきっかけに新たなネットワークが広がりました。

～ご登壇者のみなさま～

- 沖縄県知事 玉城デニー様
- 駐日ボリビア多民族国家臨時代理大使 ナターリア フェルナンダ サラサル バルデラマ様
- ボリビア沖縄県人会 会長 比嘉徹 様
- ウチナービジネスワークショップ 代表 玉城裕貴 様、玉城優美 様
- レキオソフト株式会社 代表取締役 柴寄淳 様
- 株式会社みらいおきなわ 代表取締役常務 木村政昌 様
- 沖縄県文化観光スポーツ部 部長 宮城 嗣吉 様
- 株式会社伊島 代表 島袋正克 様
- WUB 沖縄 会長 上江洲仁吉 様



OKINAWA TO 沖縄プロジェクトとは?



沖縄出身の移民が戦後に開いた南米ボリビアにある「オキナワ移住地」で沖縄県系人が生産した大豆や小麦などの農産物を、母県である沖縄県へ輸出するとともに、双方向の経済交流を目指すプロジェクトです。オキナワ移住地と沖縄県の経済活性化やビジネスを通じた人材育成を目指し、将来的には日本全国のマーケットや世界の沖縄県系人による経済交流へと拡大させていきます。



プロジェクトのきっかけ 2020年2月

農業生産法人ゆいまーる牧場(沖縄県石垣島)の金城会長が、JICAの日系社会連携事業に参加されブラジルへ派遣された際、南米の沖縄県系人が作った大豆の輸入を決意しました。



はじめての貴重な一歩 ~オキナワの大豆が、沖縄に到着!~



2021年1月

ボリビア在の(株)伊島(那覇市出身/島袋正克代表)を介して、オキナワ移住地の農協(CAICO)から20トンの全脂大豆を輸出



2021年3月

チリで船積み・出港し、神戸・那覇経由で石垣港に到着。
直輸入により、コスト40%削減に成功!



現在

石垣島で石垣牛を生産・販売する、ゆいまーる牧場で牛の飼料として使用

今後プロジェクトが目指す姿

1. 母県との経済交流によって、ボリビア、そして世界のウチナンチュ(沖縄県系人)と沖縄県の経済交流に寄与する。
2. 沖縄企業の海外進出及び製品・技術の普及に協力し、母県の経済活性化に寄与する。
3. ウチナンチュ・ビジネスの新たな展開を創作し、持続可能なビジネスを開発する。
4. 新規事業の展開によって新たな人材を育成する。



オキナワ移住地の歴史

沖縄戦後の大規模な米軍基地建設により、農地などの耕地不足問題を解決するため、当時の琉球政府は戦災民に対して移住を呼びかけ、1954年にボリビアへの移住が開始されました。風土病や天災被害などによりボリビア国内を2度移転の末、1956年、故郷沖縄を思い開拓地を「コロニア・オキナワ」と名付け、原始林を伐採し、農地を作り、種を蒔き作物を実らせました。度重なる水害や干ばつ等の自然災害に見舞われ厳しい開拓に耐えかねて、ブラジルやアルゼンチンなど隣国に再移住した人も多くいました。



オキナワ移住地の現在

オキナワ村には第1、第2、第3と3つの移住地があり、面積約11万1千ヘクタール（沖縄本島よりやや小さい）の土地に、約250世帯、約900名の沖縄県系人が暮らし、その多くが農業に従事しています。



オキナワ移住地の経済

幾多の困難を乗り越えた開拓地は現在、大豆、小麦畑が広がる広大な土地に変貌し、ボリビア国有数の農業生産地へと発展し「小麦の首都」と呼ばれるまでになりました。他にも、米、サトウキビ、トウモロコシ、マンゴー、アセロラなどの熱帯フルーツや、牛肉・豚肉など畜産に力を入れている農家もあります。



1954年入植以降、オキナワ移住地と沖縄県との経済交流はありませんでしたが、2021年オキナワ移住地産の大豆出荷によって、貴重な一歩を踏み出した「OKINAWA TO 沖縄プロジェクト」。

2022年10月 JICA 沖縄センターで開催されたビジネスシンポジウムで高まった気運、生まれたつながり、縁を大切にしながら、2023年以降も新しい人材、地域を巻き込み、さらに交流が発展することが期待されます！